

消化器内科のこの一年

滋賀医科大学消化器・血液内科（第二内科）同門会の皆さまにおかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

2024年1月、能登半島での震災に始まり、波乱の幕開けとなったこの1年でした。本年3月末には、長きにわたり教室の研究・運営に尽力された安藤朗教授が退任されました。その後は消化器内科の教授不在という不安定な状況の中で、教室員一丸となり関連病院のご協力を得ながら教室運営を続けてまいりました。関連病院の先生方には、多大なるご理解とご支援を賜り、心より感謝申し上げます。

消化器内科教室でのこの1年間の取り組みと成果についてご報告申し上げます。

卒前教育では、Post OSCE を意識した身体診察技術の習得に加え、伝統である全人的医療の重要性を学生に伝える取り組みを強化しました。外来での詳細な問診指導、症例発表形式のプレゼンテーション指導、内科学会での発表機会の提供、学生を筆頭著者とした英語論文投稿（5回生東絢音さんと指導医の井上助教による Internal Medicine への掲載）など、学生の学びと研究マインドの向上に努めました。このような取り組みの結果、昨年度の学生臨床実習満足度調査では、全33ユニット中第2位という評価をいただきました。この成果は、消化器内科スタッフ全員が「教育への熱意」を共有し、実践した賜物と感じております。

卒後教育においては、研修医や専攻医が早期に内視鏡手技で成功体験を得られるよう、早期成功体験教育を引き続き実践しました。特に、肝臓および消化管領域で欠員が生じている厳しい指導体制の中でも、医療安全を確保しながら若手医師のスキル向上に努めてくれたスタッフには、心より感謝申し上げます。教室の伝統である「屋根瓦教育」に基づく教育体制は教室全体の雰囲気や常性を常に明るく保ち、その成果も相まって次年度には新たに4名の専攻医が加わります。

研究面では、安藤教授・西田講師指導の元、横田佳大先生が学位を取得されました。また、臨床研究においては、4月以降消化管・胆膵・がん化学療法領域から10本の論文が採択されました。また、これまでの炎症性腸疾患領域における研究成果や胆膵領域でのデバイス開発に関する産学連携事業の成果が高く評価され、文部科学省の高度医療人材養成拠点形成事業に採択されました。この予算を活用し、煩雑な倫理審査手続きの代行業務などを担う研

究補助事務員を1名採用しました。今後も、働き方改革により研究や臨床の時間確保がますます困難となる時代の流れに対応し、医局員の研究負担を軽減するため、システムの効率化や業務の改善に一層取り組む必要性を感じております。

病棟運営においては、診療患者数や剖検数、臨床系論文数、特定臨床研究数などの要素で評価される「病院経営貢献度指標」において全診療科中第2位の好成績を収めました。コロナ禍で落ち込んでいた内視鏡件数はようやく年間7000件台に回復しました。2026年に予定されている光学医療診療部の新築移設に向けて、大学の中長期計画である年間9000件を目標にさらなる診療体制の充実を図る必要があります。

この1年、多くの困難を乗り越える中で、教室員全員の尽力により無事に教室を運営することができました。改めて、ご協力いただいた関係者の皆さまに心から感謝申し上げます。

令和6年11月

滋賀医科大学 内科学講座 消化器内科

診療科長 稲富 理